

留学体験を持つ日本語学習者4名が日本・日本語に関わり生きる径路
—複線径路・等至性アプローチによる分析—

The Trajectory of Lives of Four Ex-Oversea Students of Japanese Language Who Live Their Lives Related to Japan and Japanese: Analysis by Trajectory Equifinality Approach

小澤伊久美, 国際基督教大学, 丸山千歌, 立教大学

Ikumi Ozawa, International Christian University, Chika Maruyama, Rikkyo University

1. 研究の背景と目的

2018年5月1日現在の外国人留学生の数は30万人弱で前年比12.0%増（独立行政法人日本学生支援機構, 2019）となったが、2018年には「出入国管理及び難民認定法」が改正され、また、2019年には「日本語教育の推進に関する法律」が公布・施行されるなど、日本社会の多文化・多言語化は今後さらに進むことが予測される。このような時代において、非日本語母語話者である日本語学習者が「日本語・日本社会と向き合って生きていこう」と考えるに至る径路や、そこに影響を与える要因を明らかにすることは、知日派・親日派の育成を考える上で非常に重要である。

しかし、同じような経験をしていたとしても、留学生みなが同じような変容の道筋をたどるわけではない。その人にとって、なぜその経験が意味を持つものとなるのか、何がどのようにその人の変容を促すのかの解明が求められる。

このような背景から筆者らは、文化心理学の考えに基づき、日本への留学経験を持つ日本語学習者らの人生の径路を解明しようと考えた。文化心理学では「個人が日常的に相互行為を行う他者や人工物（道具）」（上村, 2018, p.277）を文化ととらえ、「自己と文化とが相互に関係しながら個人が文化を創り上げる」（木戸・サトウ, 2019, p.10）と考える。文化心理学の第一人者の一人であるヴァルシナーは、「記号」を「未来と向き合う何らかの機能をもち、過去の状態から何か新しいことへと導く何か」と定義しているが（木戸・サトウ, 2019, p.36）、筆者らは元留学生の人生の径路にどのような記号が作用しているかを明らかにする一連の研究に取り組んできた（丸山・小澤, 2018; 丸山・小澤, 2019; 小澤・丸山, 2019; Ozawa and Maruyama, 2019）。

筆者らによるこれらの先行研究は、調査協力者のうち1名に焦点を置き、その変容の径路を可視化したものであった。本稿では、これまでに個別に分析を進めてきた4名全員を取り上げ、以下の2点について、彼らの径路の共通点や相違点を明らかにしたい。

- (1) 「日本語・日本社会と関わって生きていこう」と考えた径路
- (2) その径路の分岐点で影響を与えた要因（「社会的方向付け」及び「社会的助勢」）

2. 研究の概要

本研究では、①個人別態度構造分析（Personal Attitude Construct Analysis: PAC分析法）（内藤, 2002）と、②複線径路・等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）（安田・滑田・福田・サトウ, 2015）という二つの手

法を組み合わせ用いている。PAC 分析法の採用は、丸山・小澤（2018）他と同様で、インタビュー実施者と協力者とが、インタビュー実施者の協力者に期待するストーリーを共同で構築するリスク（佐藤, 2015）を低減することを念頭に置いたものである。インタビューの元となる連想語が「調査協力者の自由連想によって出されるため、調査協力者は調査者が想定しなかった項目も提示することが可能」であり、調査項目の設定の自由度が各段に高く、また、調査協力者が中心となるという特徴がある（丸山, 2016, p.364）。

TEA は、歴史的構造化ご招待（Historically Structured Inviting: HSI）と複線径路・等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling: TEM）、発生の三層モデル（Three Layers Model Of Genesis: TLMG）の3つからなるアプローチであるが、本研究ではそのうち、HSI と TEM を用いている。

HSI は、研究者が関心を持つゴール・目標にあたるイベントを実際に経験している人物を招待して、その話を聞くという手続きのことである（安田他, 2015）。本研究の課題は、日本・日本語に関わりを持って生きる径路と、日本留学・日本語学習体験の位置づけとその変容を探ることであるため、調査協力者（以下、協力者）には「半年から1年の日本留学を経て母国の大学を卒業し、数年以上経過してから、日本で職を得て、仕事等を通じて日本社会と関係を持ち続けることを選択してから数年以上経過している元日本語学習者」という属性を持つ4名を HSI により招いた。4名の概要は、表1の通りである。

表1 協力者の概要（調査時現在）

協力者	概要
A	オーストラリア出身の 30 代男性。第一言語は英語。非漢字圏。オセアニア地域の大学で Computer Science を専攻していたところに独学で学習を開始、再度大学に入学し Asian Studies で日本語を専攻したときに本格的な日本語学習を開始した。1 年の日本への交換留学後、JLPT の N2 に合格、その 2 年後に JLPT の N1 に合格した。本格的に日本語学習を開始してから N1 に合格するまでの期間は約 6 年間。非漢字圏。卒業後に再来日し、いくつかの仕事経験を経て、現在は日本の翻訳事務所に翻訳者としてフルタイムで勤務。
B	ベトナム出身の 30 代女性。第一言語はベトナム語。非漢字圏。小学校時に米国移住、中等教育を経て米国の大学に進学、日本語学習開始。大学ではコミュニケーション学を専攻、1 年の日本への交換留学を経て卒業。卒業後に再来日し、日本の私立高校に常勤・専任講師として勤務。その後、日本の大学院に進学し英語教育を専攻。進学と同時に多文化共生の実現を目的に掲げる機関で英語講師として職を得て、大学院で学びつつ英語講師として働いてもいる。
C	オーストラリア出身の 30 代女性。第一言語は英語。非漢字圏。敬虔なクリスチャンの家庭で育つ。中等教育で 2 年日本語・日本文化学習、大学入学決定後に 1 年間広島の高校へ留学、大学ではアジア研究と美術を専攻、1 年の日本への交換留学を経て卒業。その後しばらくしてから日本の大学院に進学（専攻は日本研究）、半年は日本語も履修。修士取得後、博士課程に進学するが満期退学。その後、日本に残り、非常勤で大学職員や英語教師などを経験。数年前から日本国内でフルタイムの大学職員として勤務。
D	ペルー出身の 30 代男性。第一言語はスペイン語。非漢字圏。イタリアにルーツのある家庭に育つ。7 歳で英国移住。英国移住後は学校で英・仏語を学ぶ。大学入学前に

夜間コースで日本語学習。学部は日本語専攻、1年の交換留学を経て学部卒業後同時通訳のサマーコース（8日間）、日本の大学院（研究生を経て、別の機関の修士課程）ではメディア論・社会学を専攻。大学院卒業後、日本の大学に就職（特任講師×2回）、非常勤講師として大学で働きつつ地方都市の研究所の業務委託を引き受ける。その後、その研究所に就職。

この4名に対して、1名につき最低3回、合計約10時間のインタビューを実施した。インタビューの際の語りは全て、協力者の許可を得て録音し、書き起こして分析の対象としている。

初回のインタビューでは「わたしと日本・日本語の過去・現在・未来」に関する自由連想に基づくPAC分析法を実施した。なお、PAC分析の統計処理は、重要度順に並べた各連想語の非類似度評定をSPSS version 20を用いて階層的クラスター分析にかけた。非類似度評定とデンドログラムは紙幅の都合で省略する。

次に、初回語られた内容から、実現した経験と、理論的にあり得た経験とを、非可逆的な時間の経過の中で図示化するTEM図として描き、それを挟んだトランスビューを実施し、TEM図を完成させた。トランスビューとは、研究者と協力者がTEMを用いた複数回の面接を行って、両者が見方の共有をすることを指す（安田他, 2015, pp.25-26）。そして、トランスビューを経て完成したTEM図を個別に分析し、4名それぞれの径路を明らかにした（丸山・小澤, 2018; 丸山・小澤, 2019; 小澤・丸山, 2019; Ozawa and Maruyama, 2019）。

本研究では、この次の段階として、4名のTEM図を比較し、共通点や相違点を分析した。TEAでは、対象者が1人ならば個の豊かさ、 4 ± 1 人ならば多様性、 9 ± 2 人ならば類型化が得られるとされており（安田他, 2015, p.28）、本研究では4名の径路の多様性を検討することを目的としている。

3. 結果と考察

3.1 4名のTEM図

TEM図に用いた概念は表2の通りである。

表2 TEM図に用いた概念

等至点 EFP (Equifinality Point)	ある定常状態に等しく辿りつくポイントとして、研究当初に研究者が設定したもの
第2の等至点 2 nd EFP	インタビュアーとのやりとりの中で把握された等至点
両極化した等至点 P-EFPT (Polarized EFP)	等至点とは価値的に背反する事象
必須通過点 OPP (Obligatory Passage Point)	ある地点に移動するために必ず通るべきポイント
分岐点 BFP (Bifurcation Point)	径路が発生・分岐するポイント
社会的方向付け SD (Social Direction)	EFPへの径路を阻害・抑制する力
社会的幫助 SG (Social Guidance)	EFPに向けて援助的に働く力

以下は、本研究が分析の対象とした TEM 図の凡例（図 1）と、4 名の TEM 図（図 2～図 5）である。



図 1 凡例

3.2 協力者 4 名が「日本語・日本社会と関わって生きていこう」と考えた径路

まず、本研究は研究開始当初、EFP を「日本や日本語と関わりを持ち、日本で生活し続ける」と想定していたが、TEM 図を修正しながらインタビューを重ねる中で、「日本に住まないとしても、日本や日本語と関わりを持ち続けて生きる」がこの 4 名の共通の EFP であるという 2nd EFP を得るに至った。協力者 A、B は、日本に住み続けることを決意していると語ったが、協力者 C、D は、定住するかどうかは決めていないと述べていた。しかし、協力者 C、D も、現在は「（場所が離れたとしても）日本と関係を持ち続ける」と考えており、日本・日本語がこの 2 名の自己実現に関与している点は同じだということが見てとれた。

次に、協力者 B、C、D については「日本・日本語と関わって生きて行こう」と考える前の段階で「日本がいい」と感じる時期があり、これを OPP として TEM 図に描くことになった。一方、協力者 A については、トランス・ビューを行った際には、「日本がいい」と感じる時期は OPP としては描かれなかったが、語りの中では EFP に近い時期において「日本にいると心が穏やかに感じる」という発話があり、日本社会のあり方が A にとって SG として働いていることは確認されている。従って協力者 A にとっても「日本がいい」と感じる時期が OPP として存在した可能性は高いと推測される。これについては、現在 SG として TEM 図に描かれている時期よりも前に存在しないのかも含め、本人に改めて確認を取る必要があると考えている。

その他の点については、協力者 B にとっては、「日本で生活して行きたいと思う」OPP が、同時に「日本でやっていけるという確信を持つ」段階であったことが明らかになっている。今回、4 名の TEM 図を重ね合わせてみると、「日本で生きて行こう」と思う前の段階に「日本でやっていけるという確信を持つ」段階が他の協力者にもあり、これが OPP として存在する可能性が高いことが見てとれた。例えば、協力者 A は、体調を崩しても職を失っても日本に住むことを選択しており、翻訳家として仕事を継続することを選択している。協力者 C も大学院を満期退学した際に「日本語力に対する自信」が SG として働いたために日本に

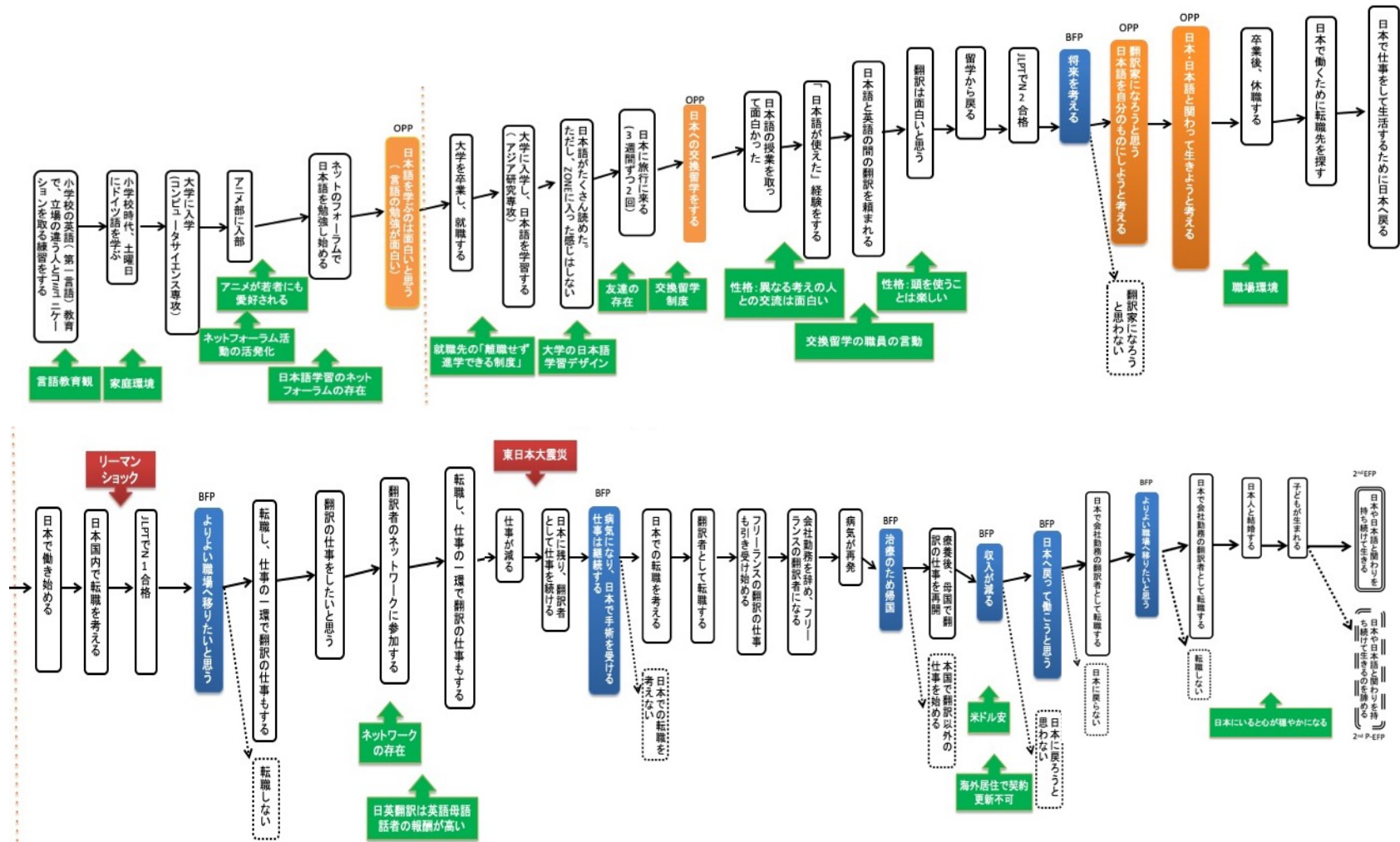


図2 協力者 A の TEM 図

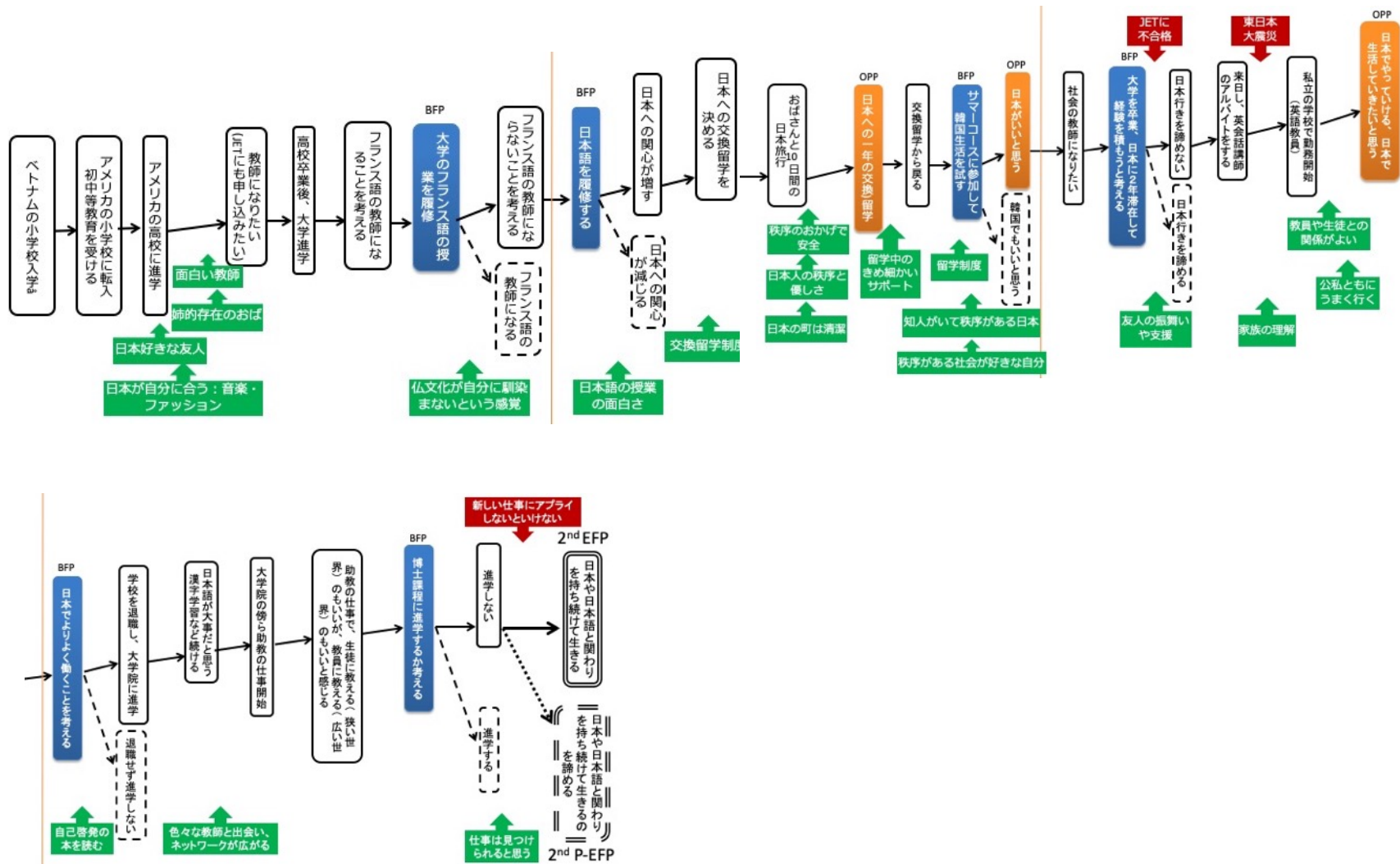


図3 協力者BのTEM図

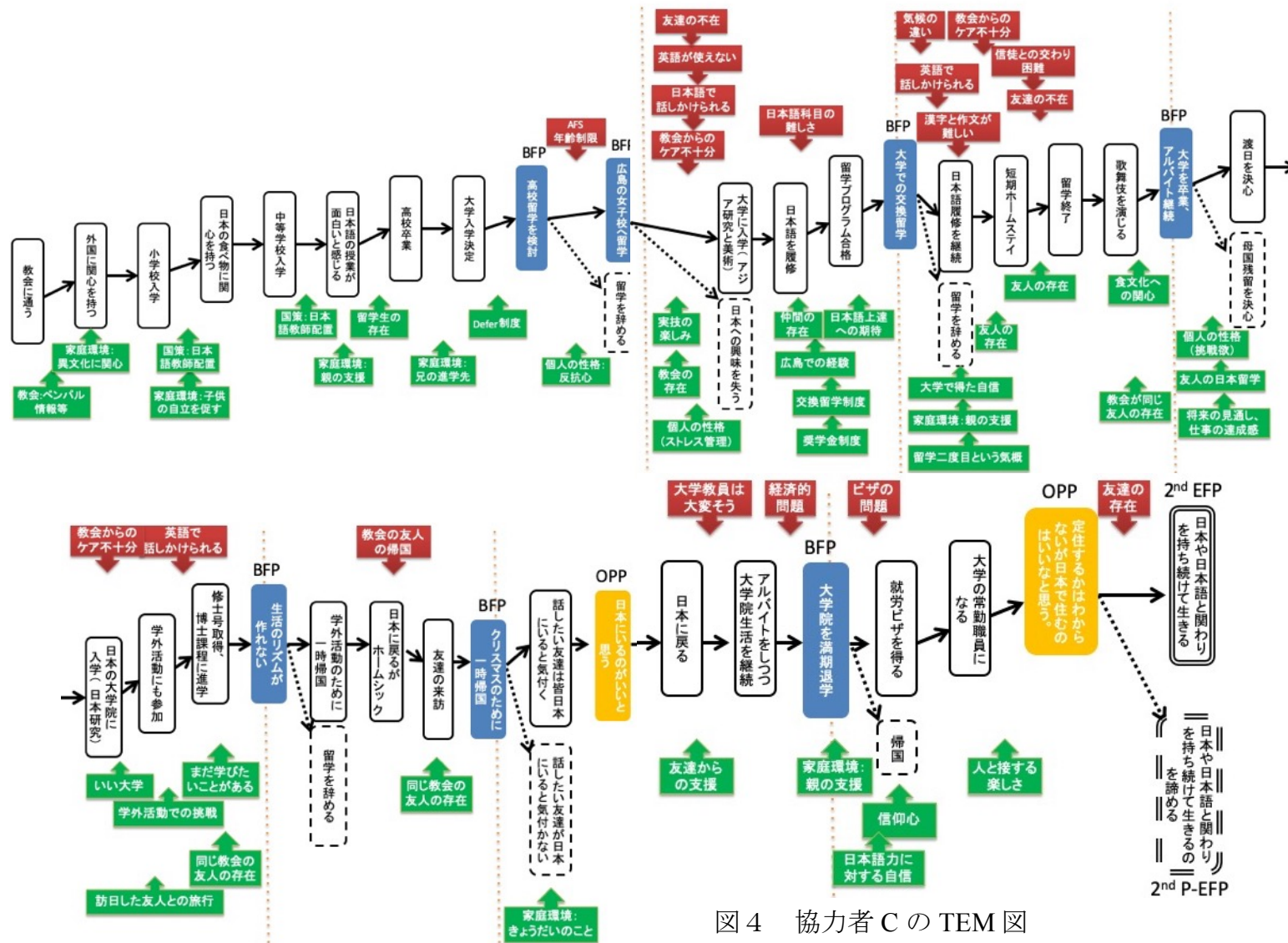


図4 協力者CのTEM図

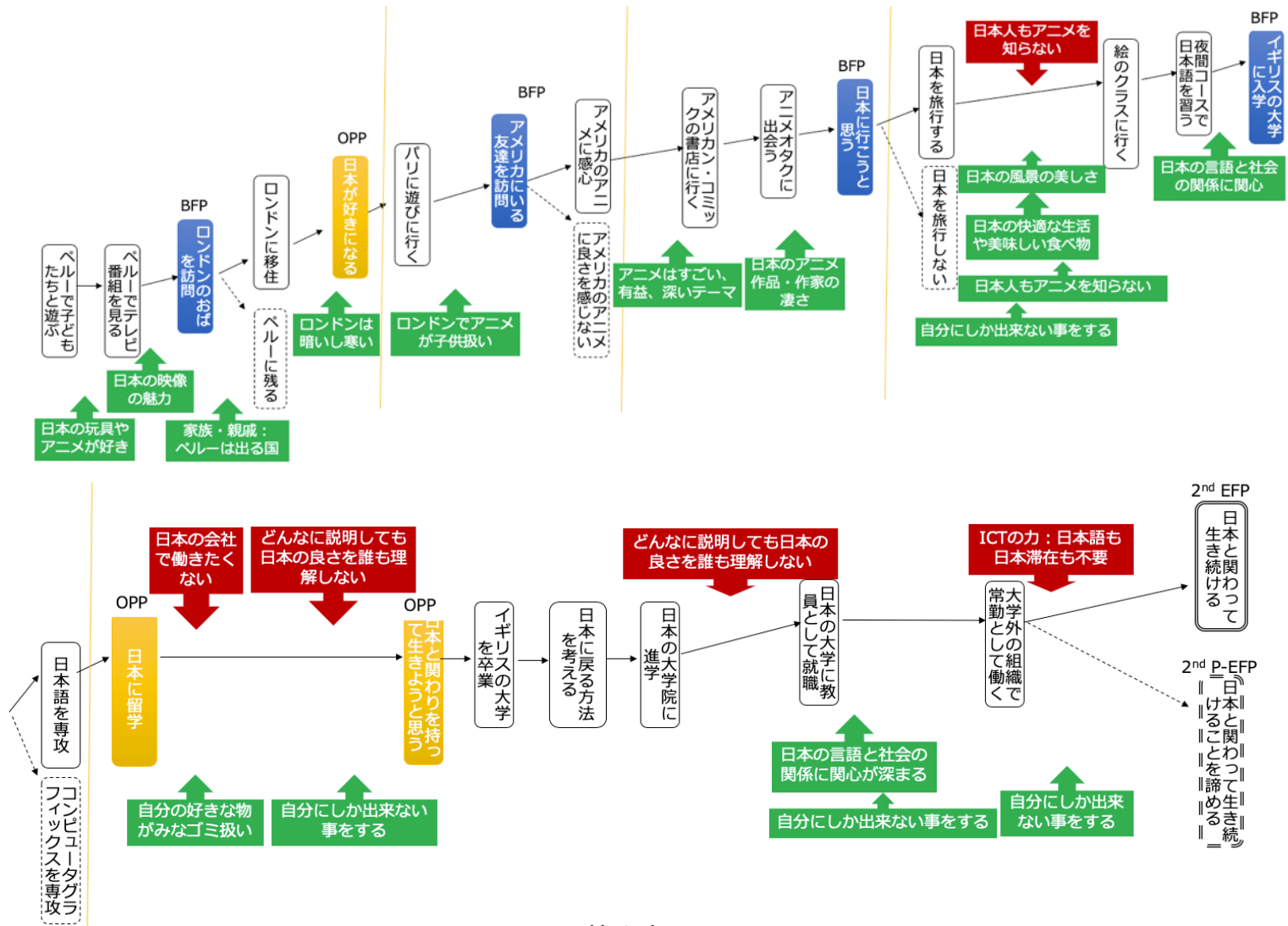


図5 協力者DのTEM

残ったことがわかっている。協力者 D も、「自分にしか出来ない事をする」が SG となって日本と関わりを持って生きて行こうと考えたことが判明しているが、そこには「自分には出来る」という自信の存在がある。これらのことは、4名にとって「日本でやっていけるという確信を持つ」が OPP として存在していること、また、そこには日本語力が SG として存在している可能性を示唆している。この点についても、改めて協力者らに確認を取る必要がある。

3.3 4名の径路の分岐点に影響を与えた要因

SG については、個々の具体的な意味は異なるものの、カテゴリーのレベルでは共通項があると言える。「家庭環境」「友人（言動や振る舞い）」「個人の性格」「日本の社会のあり方」「留学制度」などである。日本語学習経験、留学経験以外にも様々な SG が関与しており、日本語教育に従事する者は、単に日本語教育の提供のみを考えるのではなく、こうした SG に対する理解を深めることで、その必要性について、受け入れに関わる多くの人々や機関に広く伝えるという貢献ができると思われる。

相違点は SD である。東日本大震災やリーマンショックといった社会事象は比較的共通して表れるものの、試験の失敗や新しい職を得られないという不安、教会のケアが不十分であるといった要素が、前述の大きな社会事象と同じ、またはそれ以上の力で EFP への経路を阻害・抑制していることが観察された。

4. おわりに

本研究は、日本語非母語話者が「日本に住まないとしても、日本や日本語と関わりを持ち続けて生きよう」と考えるに至る径路を4名について明らかにし、その共通点と相違点を分析した。4名の径路を重ね合わせた際に、「日本に住まないとしても、日本や日本語と関わりを持ち続けて生きよう」と考えるまでに、「日本がいい」と思い、「日本でやると確信を持つ」段階が共通して存在する可能性が高いことがわかった。

また、日本社会と向き合って生きていく、生きていけるという確信を非日本語母語話者が持つに至るには、日本社会に関する SG や、人間関係に関する SG が重要な働きをしていること、日本語力も SG として存在している可能性が高いことを明らかにした。日本語教育に従事する者は、単に日本語教育の提供のみを考えるのではなく、こうした SG に対する理解を深め、その必要性について、受け入れに関わる多くの人々や機関に広く伝えていくことも肝要であろう。

今回、4名の TEM 図を重ね合わせて、4名の径路の多様性を明らかにすることを試みたが、その過程で、個々の協力者を対象にしたトランス・ビューでは可視化されなかった OPP や SG などの存在が理論的にあぶり出された。今後の課題として、この点について、協力者らにフォローアップ・インタビューを実施し、TEM 図の精緻化をはかることが挙げられる。

なお、発表当日は、国内の学位取得を目指す正規留学生の主な群である中国、韓国からの学生のインタビュー結果も見たい、日本語教育の現場に具体的にどの

ように応用できるかを知りたいといったフィードバックを得た。この点についても今後の研究に取り入れて進めていきたい。

参考文献

- 上村佳世子 (2018) 「文化心理学」能智正博他 (編) 『質的心理学辞典』 277 新曜社
- 小澤伊久美・丸山千歌 (2019) 「留学体験を持つ日本語学習者 X が日本に住み、働き続ける径路—X は分岐点でどのような葛藤を経験しているか—」 沖縄県日本語教育研究会 琉球国際大学 2019年3月9日
- 木戸彩恵・サトウタツヤ編 (2019) 『文化心理学：理論・各論・方法論』 ちとせプレス
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2019) 「平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査等について」 https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2018.html (2019年8月1日)
- 佐藤正則 (2015) 「なぜ私は学習者のライフストーリーを聴き続けるのか—日本語教師としての私の構えを記述することの意味」 舘岡洋子 (編) 『日本語教育のための質的研究入門—学習・教師・教室をいかに描くか』 117-137 ココ出版
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』 ナカニシヤ出版
- 丸山千歌 (2016) 「学習者要因の分析①—PAC 分析を活用した研究」 徐敏民・近藤安月子 (編) 『日本学研究叢書—日本語教学研究』 362-384 外語教学与研究出版社
- 丸山千歌・小澤伊久美 (2018) 「ある翻訳者が自立に至る径路—移動して学ぶ時代の日本語教育への示唆—」 『立教日本語教育センター紀要』 1,19-35.
- 丸山千歌・小澤伊久美 (2019) 「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触—日本に住み、働きつづける日本留学経験者 B の場合—」 『立教日本語教育センター紀要』 2,19-38.
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編 (2015) 『ワードマップ TEA 理論編』 新曜社
- Lehmann, O.V. & Valsiner, J. (Eds.) (2017). *Deep Experiencing: Dialogues Within the Self*. Cham, CH: Springer.
- Ozawa, I. & Maruyama, C. (2019). “The Trajectory of an Ex-Student of Japanese Language on Choosing Japan as the Place of Living.” The 1st Transnational Meeting on TEA, at Ritsumeikan Univ. OIC, Mar 2nd, 2019.

*本研究は科学研究費 (基盤(C) 課題番号 16K02824) の研究活動の一部である。